



第2分科会

圏域間の交流人口の拡大

～愛媛・大分の強みを活かした交流人口の拡大に向けた観光施策について～

各自治体の取組

【発言順】

愛媛県宇和島市長 岡原 文彰

愛媛県大洲市長 二宮 隆久

愛媛県松野町長 坂本 浩

大分県豊後大野市長 川野 文敏

大分県臼杵市長 中野 五郎

大分県佐伯市長 田中 利明

《座長》大分県別府市長 長野 恭紘

意見交換

自治体における交流人口の拡大に向けた観光施策についての取組

・ イベントの実施（牛鬼まつり、お城まつり等）
「伊達なうわじまお城まつり」や「うわじま牛鬼まつり」など、宇和島市の歴史や文化に触れ、その魅力を感じられる各種イベントを実施。市内外からの集客を目指す。

・ 宇和島市観光物産協会と連携した交流人口拡大施策

宇和島市を巡るバスツアーを造成する旅行代理店への補助金、市内に宿泊する個人に対する宿泊費キャッシュバックキャンペーンなど、各種事業の実施と情報発信を、観光物産協会と連携して行う。

・ WEBを活用した情報発信

（広告、うわじま女子旅プロジェクト）

各種イベントやキャンペーンの案内を、市ホームページ及びイベント公式サイトなどで行い、幅広い層にタイムリーに情報を届ける。

また、「うわじま女子旅プロジェクト」ではInstagramを中心とした情報発信を行っており、市外に住む20代から40代の女性をターゲットとし、宇和島市の魅力を女性目線で発信する。

取組を実施する上での課題

・ 効果測定

イベント等終了後のアンケート回収・分析など。

・ コロナ禍での課題

感染症流行状況によるイベント中止・延期の対応や、感染症対策を徹底した上での運営方法や安全性確保についての検討など。



宇和島市ロゴマーク：ココロまじわうとコロ



うわじま牛鬼まつり



うわじま牛鬼まつりの花火



うわじま女子旅プロジェクト：食べ歩き女子

発言要旨



宇和島市長の岡原でございます。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、本市における交流人口の拡大に向けた観光施策について、その取組をご説明させていただきます。

初めに、イベントの実施についてでございます。

宇和島市では、5月のゴールデンウィーク期間中に「伊達なうわじまお城まつり」を、そして7月下旬の金～日曜日に「うわじま牛鬼まつり」を開催しております。

「伊達なうわじまお城まつり」につきましては、伊達政宗の長男、伊達秀宗公が1615年に宇和島に入部した際、秀宗公とともにやってきた57人の家臣団、伊達57騎の様子を、牛鬼の勇壮な練りとともに、公募した方々による、戦国武者行列を再現するものとなっております。この57騎が築城の名士と名高い藤堂高虎により築かれ、貴重な現存する12天守の1つとして残る宇和島城へ登る様は、訪れた方々を魅了する祭りとなっているところです。また「うわじま牛鬼まつり」につきましては、有形民俗文化財でもあり、大きいものでは6mにも及ぶ牛鬼が街を練り、宇和島踊りやガイヤカーニバルといったダンス、そして夜には花火と切れ目のない3日間にわたる祭りを開催し、集客を図っているところでございます。

次に、「宇和島市観光物産協会と連携した交流人口拡大施策」といたしましては、バスツアーを造成する旅行代理店への補助金や、市内に宿泊する方に対して宿泊費をキャッシュバックするキャンペーンなど、各種事業の実施と情報発信を行っております。

続きまして、「WEBを活用した情報発信」といたしましては、各種イベントやキャンペーンの案内をホームページ及びイベント公式サイトなどで行い、幅広い層に向けタイムリーな情報発信を行っております。

また、当市の女性職員から成るプロジェクトチーム「うわじま女子旅プロジェクト」でございますけれども、市外に住む20代から40代の女性をターゲットとして、Instagramを活用した女性目線での魅力を発信する活動を行っております。

次に、取組を実施する上での課題といたしましては、イベント時にできる限りアンケート調査を実施、分析することで、効果的に反省点、改善点を見つけ出し、今後のよりよい施策の展開につなげていくことが重要であると考えております。

また、コロナ禍での課題として、その時々への感染状況に応じて、イベントを中止するのか、延期するのか、また感染対策を徹底した上で実施するのかといった、これまでとは異なるコロナ対応の必要性も十分検討する必要があると認識しております。

次に、今後の展望といたしましては、平成30年3月に宇和島市観光戦略ビジョンを策定しており、このビジョンに沿って、宇和島ならではの自然や歴史文化、食などの地域資源の活用や、周辺自治体の魅力的なコンテンツと連携した宿泊観光の促進、各種SNSを活用した情報発信などを行うこととしております。

また、当市のロゴマーク及び「ココロまじわうトコロ」という、キャッチコピーの周知を行い、認知度の向上に努め、市民が誇れる宇和島市を目指していきたいと考えております。

そして、その他として、海岸のごみ、漂着物は全国各地で大きな社会問題となっており、ご承知のとおり、景観の悪化は、地域のイメージダウン、それが観光客の減少にもつながります。

豊後水道を挟んだ自治体がここに集まっておりますので、参加自治体で、海洋ごみの清掃活動を実施してはどうかと、ご提案いたします。

以上でございます。

自治体における交流人口の拡大に向けた観光施策についての取組

大洲市友好都市交流/友好市民宿泊旅行交流事業

※対象：滋賀県高島市、北海道えりも町、

鳥取県米子市

「友好都市交流」の目的である市民主導型交流の更なる発展と継続への機運醸成を図るため、大洲市及び大洲市と友好都市関係にある自治体（以下、「友好都市」という。）住民が、相互にまちを訪ね、歴史・文化等（ビジネスを除く）への理解や住民間交流を促進させることを目的とする。

①事業実施期間

- ・令和4年度より実施

②事業内容

- ・友好都市間における歴史・文化・芸術・自然・食・体験等（ビジネスを除く）に関する知的好奇心を契機とした旅行に対して補助金を交付する。

③対象とする旅行

- ・事務局が別途認定した旅行会社（旅行業法第3条の規定に基づく登録がなされた事業者）が実施する「募集型企画旅行」及び「受注型企画旅行」のうち、歴史・文化・芸術・自然・食・各種体験等（ビジネスを除く）を目的に、大洲市又は友好都市に1泊以上する旅行を対象とする。

取組を実施する上での課題

○愛媛・大分交流市町村連絡会議の圏域市町村において、担当部署間の調整が必要となる。

○再度来訪の機会促進に向けた各自治体のブランディングやコンテンツの造成が必要である。



友好都市交流:滋賀県高島市を訪ねる旅



大洲城



おはなはん通り



古民家

発言要旨



大洲市長の二宮でございます。

実は、コロナ禍で友好都市の交流が難しくなっているという状況があり、今年度からの新たな取組について、ご紹介をさせていただきます。

大洲市と滋賀県高島市とは、陽明学の中江藤樹先生を縁といたしまして、古くから交流がございます。また、北海道のえりも町とは「風」をテーマにしたまちづくりということで、旧肱川町が旧町時代から付き合いがあり、今も交流をしております。そして、鳥取県の米子市とは、1617年に大洲藩のお殿様が米子藩からお国入りをいただいた縁を大事にして、交流を深めております。

現在、大洲市では、歴史的資源を活用した観光まちづくりの取組を始めております。大洲市には、江戸時代から続く城下町としての町割りが残っておりまして、4層4階木造で復元いたしました大洲城を中心にして、歴史的な趣を感じる町並みがまちの魅力となっております。

その昔懐かしい町並みを保全するとともに、地域の活力向上や地域経済の活性化につなげるため、良好な町並みを形成している歴史性の高い町家・古民家等を改修し、新たに分散型ホテルやレストラン、商店やビール醸造所などとして活用しております。

歴史的資源を活用した観光まちづくりを展開するDMO「キタ・マネジメント」を創設いたしまして、市の観光部局と提携をして、取組を進めているところであります。

この取組については、昨年の秋にグッドデザイン賞を受賞いたしました。また、文化財の観光施

設の新たな活用といたしまして、先ほど申し上げました平成16年に忠実に復元をいたしました大洲城の天守閣を活用して、大洲城キャスルスティを、令和2年度より行っております。

2人1泊100万円プラス消費税という、少し常軌を逸したような金額ではあるのですが、お殿様お姫様気分になっていただくという、体験型のコンテンツとして取組を始めておりまして、現在までに9件の実施例がございます。この取組は、大洲城の文化財としての価値を高めるとともに、今後の文化財保全に要する新たな財源づくりなどを目的に行っており、取組の開始以降、分散型古民家ホテル等と併せまして、各種メディアに数多く取り上げていただいております。

大洲市は、四国の西北にある片田舎ではありますが、実は今年の元旦の夜9時から、NHKで「最強の城」という特番の中で、世界遺産である姫路城や、秀吉が作った大阪城、米子城、竹田城址等と合わせて、大洲城を紹介いただきました。このような取組により、大洲市の知名度も少しずつ上がってきているのではないかと考えているところであります。

今後におきましても、大洲ならではの歴史的な町並み、建物、肱川での鵜飼いを将来にわたって保存していきながら、その魅力を発信してまいりたいと考えているところでございます。

実は、この取組はインバウンドを想定してスタートしましたが、コロナ禍で国内の多くの皆様にもご利用いただき、1棟貸しというところが、評価いただいたのかなと思っております。

この豊予海峡を挟んで、それぞれの自治体の魅力に磨きをかけ、日本の文化やローカルの魅力に関心をお持ちの欧米豪の方が、長期滞在をいただける、そんな圏域を目指していくのが、良いのではないかと考えているところでございます。

圏域内外からの誘客について、この連絡会議が協力して行っていくことで、更なる発展につなげ、そして、それぞれの自治体の魅力をブラッシュアップすることが、一番大切なのではないかと思っています。以上でございます。

自治体における交流人口の拡大に向けた観光施策についての取組

「町内の豊かな自然を活かした、アウトドアスポーツの事業の展開」
国立公園「滑床溪谷」をはじめとする、山・森・川の資源を最大限に活かしたアウトドアスポーツの展開に取り組んでいる。現在、キャニオニングやマウンテンバイク、トレッキング、トレイルラン、カヌー、ラフティングなどのアウトドアスポーツのコンテンツが充実してきており、それを組み合わせることによって滞在時間を延ばすことにつなげ、宿泊業や飲食業などにも波及させようとしている。



ロッククライミングの様子

取組を実施する上での課題

- ・ハード整備の資金面
- ・人材の確保
- ・より多くの住民が松野町の地域資源を再発見、再確認する必要がある。
- ・魅力的な資源・コンテンツがあっても、今はそれぞれ単発での体験となっているため、滞在時間が短くなり松野町の魅力を存分に体験できていない。



キャニオニングの様子



マウンテンバイクの様子



カヌーの様子

発言要旨



松野町長の坂本でございます。

松野町は、宇和島市から東へ車で30分ぐらい山の中に入った場所に位置をしており、高知県と県境を接しております、昔から高知県とも行き来が盛んなところでございます。

町の中心部には四万十川最大の支流の広見川が流れており、隣の四万十市で四万十川に合流します。また、JR四国のローカル線予土線というのがあり、これも、宇和島市から出て松野町を通過して、高知県につながっております。四万十川を大事にしながら、これまで観光振興を行ってまいりました。

松野町は、人口が今3,600人ぐらいで、愛媛県内で一番小さな町でございます。これを逆にとり、小さな町でしかできない、小さな町だからこそのできるまちづくりを行っております。

国立公園「滑床溪谷」というのが、宇和島市から松野町まで広がっておりまして、海の国立公園ではありますが、私どものところにあるのは山の滑床溪谷というところで、今一番力を入れているのが、アウトドアスポーツでございます。

溪谷には日本の滝100選にも選ばれた「雪輪の滝」があります。大分県にも「原尻の滝」がありますが、この日本の滝百選「雪輪の滝」を活用してアウトドアスポーツを振興しているところでございます。

大変、若い人たちを中心に喜んでいただいております、地元の子供たちが遊ぶような場所だったのですが、今は、ガイド会社が2つできまして、本当に多くの方が県内外から来ていただいております。

ります。

この他にも、滑床溪谷や、四万十川の自然を活かして、自転車やトレッキング、少し足を延ばして四万十川本流でのカヌーやキャニオニングなど、このような広域圏をアウトドアの聖地にしたいという展望を持っております。

しかし、コロナの影響もあり、2年半の間、目立ったことができなかったのですが、「松野四万十バイクレース」というものを3年ぶりに復活しようと考えています。

これは、林道の延長約140kmを1日で走破するので、その林道も、四駆の軽トラがローギアでやっと上がれるようなレベルの高いコースになっています。日本中からコアなバイクファンが集まってくるイベントになっています。

一方で、初心者でも走れるサイクリングコースもあります。標高差の少ない四万十川沿いでは、緩やかなサイクリングコースも準備を進めているところでございます。

実は、松野町の観光については、60年ぐらい前から行政が直営で取り組んでおりまして、その伝統を今でも受け継いでおり、この四万十川を中心に交流を進めていき、これから関係人口・定住人口の増加につなげていこうということを考えています。どうしても小さい規模の町ですので、松野町単独で人口を増やすのは難しいと感じております。少しでも多くの方に移住をしていただき、地域を活性化していく、或いは刺激を与えていただくということを施策の目玉にしております。

それともう1点、小さい町ですが、消防団や商工会などの集まりで、団体旅行するとなると、必ず別府などの大分県内に行きます。これからもそういった旅行先として、大分県を訪れたいと思っておりますが、逆に大分県の方から、この宇和島圏域に少しでも来ていただくように、自分たちの魅力アップに努めてまいりたいと思っておりますし、この交流を大事にしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上でございます。

自治体における交流人口の拡大に向けた観光施策についての取組

「おんせん県」を標榜する大分県にあって温泉資源のない本市では、「日本ジオパーク」「ユネスコエコパーク」に認定された豊かな自然と雄大で美しい大地を文字通り体感できる「アウトドア・サウナ」を観光資源として活用するため、令和3年7月に「サウナのまち」を宣言した。

サウナ愛好者を中心とした新たな観光客層への情報発信をはじめ、サウナを入口として観光客を市内周遊させ滞在時間の延長を図るため、サウナ、宿泊、飲食、小売店など市内事業者と連携した取組を進めており、「サウナのまち・豊後大野」の定着と本市への誘客促進並びに地域活性化につなげている。



サウナのまち
豊後大野

BUNGO ONO

豊後大野市：サウナのまち豊後大野口ゴマーク

取組を実施する上での課題

令和3年度のアウトドア・サウナ利用者数は前年度の約5倍に伸びており、現在のサウナブームの中で客足は伸びていくと考えられるが、今後も新規利用者の増加やリピーターにつなげるため、アウトドア・サウナ提供事業者の拡大や周遊プランの造成など満足度を上げるための取組が必要だと考える。



アウトドア・サウナ：テント内の様子



アウトドア・サウナ：清流のほとりでくつろぐ様子



アウトドア・サウナ：温まった体を清流で冷やす様子

発言要旨



豊後大野市長の川野でございます。

豊後大野市は大分県の南部に位置しております。山間の自然が豊かなまちでありますけれども、「おんせん県」にあって、温泉が出ないまちであります。

先ほど、松野町長より、別府の方に温泉めがけていくというお話がありましたが、皆様、旅行するという事になれば、温泉に浸かってゆっくり過ごそうと考え、観光地を選ぶと思うのですが、豊後大野市には温泉がないために、観光地としては、非常に弱い面がございました。

私たちの先人たちは、温泉がない中で、どうやって体を癒したかという、岩に穴を掘って火を焚いて蒸し風呂にし、汗をかいて体を整えていたというふうなことがありました。

そこを今の若者たちが目を付けて、温泉がないのであれば「蒸し風呂＝サウナ」をやったら良いのではないかとということで、「サウナのまち」の取組がスタートいたしました。

令和2年度から、若者たちのグループが「おんせん県いいサウナ研究所」というのを作り、「サウナ万博」なるものを開いて、サウナのまちづくりを始めたのですが、その令和2年度の1年間で来たサウナのお客様は800人程度でございました。その翌年、令和3年度には、私も豊後大野市はサウナのまちだということで宣言をいたしまして、マスコミにも関心を持ってもらい、令和3年度にサウナに来たお客様は4,200人と、約5倍に跳ね上がりました。先日のゴールデンウィークもかなりのお客様に来ていただきました。

このようにして、「サウナのまち」のまちづくりの取組を進めてまいります。またサウナに入りますと、体が整うので食事が非常においしく感じると、よく言われます。それなら「サウナ飯」なるものを作り、サウナに入るだけで終わるのではなく、飲食店等の地域経済にもサウナ効果を回していこうということで、「サウナ飯」「サウナ土産」など、様々なものを作りながら、このサウナのまちづくりに取り組んでいこうとしております。

この「サウナ飯」については、新たに商品開発したわけではなく、地元飲食店の人気のメニューを「サウナ飯」として紹介しており、冊子も作成したところでございます。

課題でございますが、サウナの熱源をどのように確保していくか、ということで、地元の森林組合と協定を結び、森林組合から廃材を提供していただいて、活用していくこととなりました。まさに、SDGsの精神である「持続可能性」を実現した取組と思っております。

また、豊かな自然を活かして、アウトドア・サウナも進めています。河原にテントサウナを立て、汗をかいてもらって、清流に飛び込む。まさに、大自然の中でサウナを堪能できる楽しみが魅力となっています。

また、他にも人気なのが水中鍾乳洞の近くでサウナに入り、鍾乳洞に飛び込む。これが非常に、人気になっているところでございます。

これからサウナのまちづくりを頑張っていきたいと思っております。

以上でございます。



「サウナのまち」宣言式

自治体における交流人口の拡大に向けた観光施策についての取組

国連教育科学文化機関（ユネスコ）の「創造都市ネットワーク（食文化）」加盟を契機とした食文化の魅力向上や継承を図るとともに、城下町の歴史的建造物を宿泊活用し、臼杵の歴史文化の体験コンテンツと紐付け、交流人口を増加させ、まちの賑わいや活力につなげる。

《食文化に関すること》

ユネスコ創造都市ネットワーク（分野：食文化）に加盟。食文化を磨き、産業振興を図る。

■「臼杵食楽アンバサダー」養成講座の実施

ユネスコ創造都市ネットワークに加盟認定された今後は、様々な場でこれまで以上に食関連事業者や観光・商業者等による情報発信が行われるものとする。その際、事業者には、自らの事業の範囲にとどまらず、本市の歴史や自然、文化に加え、他の事業者の魅力も交えた情報を、魅力ある語りで発信していただきたい。

■臼杵食文化体験モニターツアーの実施

発酵・醸造や有機野菜、郷土料理といった本市の食文化を体験できるツアー確立のためモニターツアーを実施。昨年度は、豊後大野市立朝地小中学校9年生が土づくりセンター見学や農産物収穫体験、後藤製菓の菓子作り等を体験。また、郷土料理やほんまもん農産物等の食や、座禅、写経、などの歴史文化を体験できるモニターツアーを実施。今年度は臼杵焼き体験等も加える予定。今後のツアー造成に活かしたい。

■食関連イベントの実施

ゴールデンウィークには春のうすき食文化フェスを事業者とともに開催し、臼杵石仏とも連動。蔵出し即売会や味噌すくい、発酵醸造講座、クイズラリー等を行った。八町大路の歩行者の通行量はコロナ前の2019年のうすき食フェス時を上回った。秋にも食に関連するイベントを開催予定。《城泊に関すること》

●『臼杵城泊』による滞在交流促進

市が所有する稲葉家下屋敷や民間古民家など、城下町の歴史的建造物を宿泊活用し、これを起点

に臼杵の食や文化体験コンテンツと絡めた誘客、交流企画を生業として産業化する「観光まちづくり」を目指す。

●地域独自の資源活用により新たな観光ニーズへ対応

その地域独自の文化を体験したり、住民との交流を求める傾向や、団体型から個人型への旅行形態の変遷を踏まえ、高付加価値サービスの展開を期待。滞在型の旅の実現。

●民間活力による産業促進

建物活用及び宿泊交流企画の実施主体として、パブリックマインドを持つ事業運営主体の立ち上げを目指す。

歴史的建造物の活用による収益構造を構築することで事業継続。産業化による交流促進と地域の宝である歴史資源の将来への継承につなげる。

取組を実施する上での課題

《食文化に関すること》

■人材育成

料理人のスキルアップが重要。地元産食材を活かすメニュー作り、地産地消の推進。

■食材となる農作物の生産量や、海産物の水揚げ量の増加

特に海産物の水揚げ量は年々減少しており、今後、さらに地元産にこだわったPRを進める上では安定した食材の確保が必要。

《城泊に関すること》

●事業運営主体の確立

人材の確保及び事業採算性を見通しを立てる必要。民間活力を取り入れ、官民の連携協力により実施体制を構築していく必要がある。

●歴史的建造物の宿泊施設活用の規制

歴史的建造物を宿泊活用する上で、特に重要となる建築基準法上の取り扱い。

●既存民間事業者との棲み分け

宿泊事業を展開するにあたり既存事業者とのバッティングしない誘客層を対象とする必要がある。

発言要旨



臼杵市長の中野でございます。

臼杵市は地域資源を活かす、交流人口を増やしていきたいということを基本に考えております。

大友宗麟以来の町並みが残っている歴史的景観を活かすことが1つ、それと食文化を活かす。同時にそれらをかけ合わせ磨き上げていくということで今取り組んでいるところです。

今日は2つのことを紹介させていただきたいと思っております。

1つは昨年11月8日に国連のユネスコの創造都市ネットワークというのがあり、その中の1つに、食文化の分野がありまして、それに、臼杵市がチャレンジしたところ、ユネスコから加盟を認定されました。この食文化の分野で、ユネスコ創造都市に現在認定されているのは世界で49都市しかなく、日本では臼杵市が2番目です。最初に認定を受けた山形県鶴岡市と連携して、積極的に取組をしていくこととしております。

また、認定をいただき「臼杵食楽アンバサダー制度」を作りまして、臼杵の食文化や歴史、豊かな自然環境を学び、来られたお客様に広げていただけるような人材を養成しようというものです。

そして「臼杵食文化体験モニターツアー」では、発酵醸造や有機野菜、郷土料理といった食文化を体験できるツアーというのをやっております。現在はレギュラーツアーの造成に努めているところです。

食フェスの中では、鶴岡市の食文化との交流も取り入れて開催を予定しています。

2つ目が、臼杵城泊を前向きに検討しております。まさに先ほど大洲市長が説明された取組、大洲に学ぼうということで、今、大洲市に何度も行ったり、大洲市の方の知恵を借りたりしながら取り組んでいるところです。

臼杵市も稲葉家下屋敷と言いまして、殿様が臼杵に帰ってきた時に、別荘として使っていたところがあるところが残っております。また、古民家もたくさんありますので、そういうものを宿泊に使っていただき、その中で、伝統的な食文化や自然体験を合わせたコンテンツを作り上げ、今までと違う旅のよさを、皆様にPRをしていきたいと考えております。

課題については、料理人のスキルアップが必要ではないかと思っております。

臼杵市のフグ料理は大変有名で、冬のシーズンは東京や大阪、福岡など全国から10万人ぐらいの方に食べに来ていただいているのですが、何か新しいものにチャレンジするということがありません。

変化を求められる時代でもありますので、新しい発想があると、より地域が盛り上がるのではないかと思っております。

城泊については、5万円でも10万円でも泊まってみたくと思えるようなコンテンツを上手に作り上げていく必要があると考えております。

その中では、市民の皆様が今までと違うものにチャレンジしようという意識をどのくらい普及・波及していけるのか、というのが大きな課題になっていますし、また、市が直営で行うものでありませんので、そういうものにチャレンジしていくにあたり、銀行等を含めた受け皿作りというのも、1つの課題であると思っております。

今後ですが、ユネスコ加盟を契機とし、新しい臼杵の食文化を作っていくことを目指しながら、これから取り組んでいきたいと思っております。

特に、たくさんの方々にお知恵をいただきながら、よりよい臼杵市を作っていこうと思っておりますので、これからもどうぞよろしくお願ひします。

以上でございます。

自治体における交流人口の拡大に向けた観光施策についての取組

当市では、自然環境にやさしい持続可能なまちづくりのため、SDGsの視点に立ち、経済・社会・環境の3側面が調和した施策による「さいきオーガニックシティ」の推進に取り組んでいる。

【サイクルツーリズムの推進】

風光明媚な海岸線や豊かな山間部の自然を活かした誘客に取り組むとともに、市民が自転車を利用しやすい空間の整備を進めることで、九州一広い佐伯市を自転車で楽しく安全に走ることができる“まち”になるよう、様々な関係者が連携・協力して自転車に関する施策を総合的に推進するため令和2年度に「佐伯市自転車活用推進計画」を策定した。また、令和3年度は全国組織「自転車を活用したまちづくりを推進する全国市区町村長の会」の会長に就任し、令和5年度に「第5回全国シクロサミット」が佐伯市で開催される。

現在、サイクルツーリズムの推進に関する各種施策や自転車の走行空間の整備など、サイクリストの誘客を目的とした事業に積極的に取り組んでいる。

[具体例：サイクルスタンプラリー、マウンテンバイクイベント、サイクルフェスタ等]

【食観光の推進】

日豊海岸国立公園にも指定されているリアス海岸に流れ込む黒潮と阿蘇山から連なる九州山地の山々の恵みに支えられ、豊後水道周辺は豊かな食材の宝庫となっている。当市においても、これら海・山の幸を使った食観光が観光の柱となっている。日豊海岸に面する宮崎県北部と連携して行われる「東九州伊勢エビ海道事業」や「日豊海岸岩ガキまつり」では、佐伯市、延岡市、日向市だけにとどまらず、人口の密集する大分都市圏や福岡都市圏からも多くの観光客が訪れている。

豊後水道と宇和海は、ともに日本屈指の好漁場であり、ブリ、カンパチ、真鯛、また近年では国内を代表するクロマグロの養殖場となっている。両地域が連携すれば、日本一の規模とスケールで

広域的な食観光キャンペーンが実施できるため、九州、四国、さらには関西圏域からの誘客が図られる。加えて、食観光に訪れた観光客に対して、養殖場などの生産現場見学をコースに組み込むことで、自然環境の大切さや海の豊かさを学ぶ機会となる。

取組を実施する上での課題

【サイクルツーリズムの推進】

サイクリストの誘客にあたってはサイクルートの指定やサイクルステーションの設置など、交流市町村の一体的なハード整備が必要であるが、事業費が多額となるため財源の確保が課題である。



空の公園 走行シーン

【食観光の推進】

大規模なキャンペーンを実施するためには、飲食店の協力や生産者の理解など長期間の地道な取組が必要である。

大分・愛媛間をつなぐ交通手段がフェリーのみで移動に時間がかかるため、一体的なキャンペーンを行うための工夫が必要。(国道九四フェリー：1時間5分/臼杵～八幡浜：2時間25分)



第8回日豊海岸
岩ガキまつりポスター



伊勢えび海道ポスター

発言要旨



佐伯市長の田中でございます。

佐伯市は九州で一番広い面積のまちでありまして、森林が87%占めており、いわゆる森林文化と同時に、海に面し、海産物も多くありまして、山を育てながら、海の豊かさを作ってきたまちです。

その意味で、今、持続可能なまちづくりとして、SDGsの視点に立ちながら、経済・社会・環境のバランスを図るとともに、デジタル化など、大きな視点を持って「さいきオーガニックシティ」を目指していこうと思っています。

SDGsは、17のゴールと169のターゲットがあるわけですが、その中で、特に2つを重点的に取り組んでいます。

1つは、サイクルツーリズムの推進です。

私が、昨年、全国の「自転車を活用したまちづくりを推進する全国市区町村の会」の会長に就任しまして、愛媛県の今治市長が前会長であったのですが、このたび私の方に会長職が回ってきまして、自転車を活用したまちづくりをどう進めていくかということ、熱心に取り組んでおり、「ツール・ド・佐伯」には、市内外から1,800~2,000人の方々が参加します。

現在、我々は、佐伯市だけが良くなるという発想ではなく、周辺地域も巻き込んでやっていこうということで、臼杵、津久見、佐伯、延岡、日向の広域連携の中で、この自転車活用をどういうふうに図っていくか、また、広域連携の中で、観光交流促進や、防災、教育等を含め、様々な佐伯にないもの、それぞれのまちが持っているものを活

かしていくという考え方に立って、この自転車活用も行っていきたいと思っています。

ちなみに別府市とは、観光経済、教育等を含めた包括的な協定を結んでおります。また、国定公園の関係では豊後大野市と、ユネスコエコパーク等の関係もあります。様々な面での広域連携をこれから図ることが、人口減少社会での一つの手法と考えております。

例えば、1つの30万人程度の圏域を作って、様々な問題に対して広域的に対応していくということが、前向きな対応だと考えています。

それと佐伯市は、豊後水道、黒潮と潮流の速さで魚の鮮度が大変良いまちでございまして、海面漁業はもちろんですが、養殖業も盛んで、ヒラメ、ブリ、マグロの養殖は全国でもトップクラスです。

これからの食糧難の時代、特にタンパク質不足が世界的に危惧されている時代に、この養殖業が持つ力が、これから評価されてくるのではないかと考えております。

その意味で、これから台湾、ベトナム等の東南アジアとの関係を詰めながら、佐伯の魚をそういうところに持っていくことや、現在アメリカにも、乾し魚などを輸出していますが、インバウンド、アウトバウンド、多面的な交流を図りながら、水産業を促進していきたいと思っています。

また、サイクリングでは、九州と山口による「ツール・ド・九州」が、来年開催予定ですが、コロナ禍にあってもそれぞれの地域において、サイクルルートやサイクルステーション、駐輪場等のハードの整備や、自転車事故への対応などの課題があります。今月の28日には、岸田総理にお会いして、そのような予算面でのお願いもすることとしておりまして、段取りも順調に進んでいるところでございます。

「シクロサミット」というサイクリングの全国大会がございまして、来年は佐伯市が「第5回全国シクロサミット」の会場になりますし、様々な自転車交流の機会を作りながら、サイクルツーリズムをどんどん推進していきたいと思っています。以上でございます。

自治体における交流人口の拡大に向けた観光施策についての取組

別府市では、旅行に対する価値観や観光需要の変化に対応した持続可能な観光地としての体制構築を目指し、「ユニバーサルツーリズム」「観光DX(デジタルトランスフォーメーション)」「免疫力日本一宣言の実現」「食×観光」の4項目を柱に、今後の方策等を協議・検討する「別府観光あり方検討会議」を、令和3年9～12月にかけて実施。

各柱の政策提案は、市の各担当課で整理・協議し、障がいのある方や高齢者でも別府の旅を満喫していただけるような取組を加速させ、観光経営のデジタル化により観光客も市民の皆様にも喜ばれる観光の姿を模索し、温泉が与える好影響のエビデンス取得とウエルネスツーリズムとしてのブランディングを図り、農業や観光に携わる方々と協力して別府の美味しい農産物を観光客に提供できるよう、これからの事業に反映させる取組を開始する。



わたし、ととのう、別府。：温泉



わたし、ととのう、別府。：砂湯



地獄蒸し玉手箱



鉄輪湯けむり広場からの光景

取組を実施する上での課題

別府観光における以下の課題を解決すべき課題として考えている。

- ①1人あたりの観光消費額が低く、平均宿泊数が少ない
- ②全国と比較して観光業への依存が強い
- ③観光業の生産性向上と域内経済循環の向上の必要性



わたし、ととのう、別府。：別府公園の竹林

発言要旨



別府市長の長野でございます。発表させていただきます。

別府市は、大変ありがたいことに、コロナ前は800万人以上の観光客が来られていました。コロナの影響により2～3割程度の人出まで落ち込むこともありましたが、直近のゴールデンウィークは、約7割まで足取りが戻ってきた状況です。

今回のコロナ禍により様々な影響がありましたが、別府市の観光は、以前のようにたくさんの観光客が訪れる時期が必ず来ます。その時に、その多くの観光客をどのように受け入れれば良いのかという課題があります。

観光というのは一つの重要な手段であって、目的は市民の幸せであると、再認識をさせていただきながら、一方で、観光客を迎える側、受け入れる側の満足度も充実させていかないと、来られた観光客が本当に満足して帰っていただけないのではないかと考えています。今回のコロナを機に見直しを行い、観光全体が、そのような姿勢で取組をリスタートしていこうとしております。

観光の4大事業というふうに位置付けておりますが、1つ目が「ユニバーサルツーリズム」、2つ目が「観光DX」、3つ目が「免疫力日本一宣言の実現」、4つ目は「食×観光」です。

別府市の課題は、先ほど申し上げましたが、1人あたりの観光消費額が少ないこと、地域経済が観光業に強く依存しておりコロナのような危機が発生した時の回避方法、生産性を向上させ稼げる産業を育てる、といった課題の解決のために先ほどの4大事業もあるわけです。

「ユニバーサルツーリズム」についてですが、障がいのある方は、なかなか満足に観光できないという実態があります。旅館ホテル単体では対応されていることはありますが、観光エリアでユニバーサルツーリズムを実施しているところは少なく、九州では、嬉野等の一部の観光エリアが実施している状況です。今後、高齢者の方が増え、足腰が弱くなっていく方が増えてきます。障がいの有無というよりは、足腰が弱く思うように旅行ができない、そういった需要に応じていくため、当事者の皆様と連携して一生懸命取り組んでいるところです。

「観光DX」については、お客様が何を求めているのか、どこから来て、どこに行くのか、そのようなビッグデータの分析等を行うため、別府市公式宿泊予約サイトを作りました。大手旅行代理店と同様のサイトを作り、徹底的に、地域密着型、本当に地域の人しか知らないようなコンテンツをめぐるとともに、高付加価値のものをサイトの中で案内しています。

また、四国九州でしっかりと連携できるように、具体的に送客を行う仕組みにしました。

現在、順調に運用できていますので、これからも作り込みをしていこうと思っています。

「免疫力日本一宣言の実現」についてですが、温泉は具体的にどう身体に良いのか、うまく表す手段がありません。そこで、新しい物差しとして、腸内細菌に目を付け、泉質ごとや男女別などで、入浴により、腸内細菌がどのように変化したかということ、別府市と九州大学都市研究センター、旅館ホテル組合が連携して、調査研究をしているところです。研究結果はいずれ旅行商品に活用したいと思っています。

最後に、「食×観光」ですが、お客様から別府でとれたものが食べたいとよく言われます。これから、生産者が儲かりつつ、別府独自の農産品を作っていきたいと思っておりますし、作り手探しから販路確保まで、入口から出口までの一連した農林水産業振興に取り組んでいるところでございます。以上でございます。

長野 恭紘

大分県別府市長

意見交換ということで、各首長の発言の中で、様々なキーワードは出てきました。

アウトドア、SNS、インバウンド、高級路線、長期滞在、地域資源の活用、SDGsなど、地域の特性を活かして観光地づくり、地域間交流をされておりました。

私が感じたのは、皆様、地域の特色に合わせて取組をされており、コンテンツがすごく充実していると思いました。

そのコンテンツをどういうふうに、情報発信や、効果的な宣伝を行っていきけるか、また、地域間交流につなげることができるのか、ということが鍵ではないかと思いました。

先ほど、臼杵市長が大洲市へ勉強に行ったということをおっしゃっていましたが、その中でDMOの話もあり、そのDMOを設立した経緯や、今後、DMOをどういうふうに展開していこうと考えていらっしゃるのか、お聞かせ願えないでしょうか。

二宮 隆久

愛媛県大洲市長

先ほど発表させていただいた、地域資源を活用した観光まちづくりを進めるという施策にあたり、それをどこが主体として行うのか、というのが最初の課題でした。

社団法人を作り、DMOを創設してスタートするべきだと結論にいたりまして、DMOを立ち上げました。

立ち上げにあたり、DMOの代表には、市長に座って欲しいと要請がありまして、私がお席に就きました。

その後、古民家等を再生し、提携企業がホテル等の運営も始め、そして、大洲城の天守閣を活用した城泊事業もスタートするという、動き出した段階で、年度が変わりましたので、これからどうしていくのかというところで、やはり民間の方を、代表にするべきであろうということで、私は代表

を次の方に譲りました。

地銀に地方創生部というのがありまして、そこが様々な取組をしてくださいます、提携する企業と大洲市をつないでもくれました。その部長が退職するという機会でもございましたので、代表理事に是非就いていただきたいと考えまして、地銀の会頭や頭取にも直接、私の方からお願いに上がり、就任をしていただきました。

今は、ある程度うまく動き出していると思っております。

大洲市の場合は、DMOが鍵になったということと、コロナが収まったら自然とある程度いい方向に進んで行くと思っております。

あとは、地域経済にどう波及効果をつないでいくことができるのか。農業の町でもございますし、豊予海峡につながる長浜の港もあり、ふぐや鱧も揚がります。

地域の産物を宿泊客の方に、美味しく召し上がっていただけるように、とにかく食事は地元産を徹底しようという形で、提携企業も頑張ってくれております。

我々も一緒になって、取組を進めている状況でございます。



DMO：キタマネジメント ロゴマーク

長野 恭紘

大分県別府市長

本当にコンテンツは充実しており、DMOが今後、その収入源をどのようにしていくのか、また、人材をどういうふうに登用していくかというところは、我々も悩んでいるところではあります。

そういう共通の課題でDMOも1団体だけではなく、いくつか作られているところもあったと思います。

問題はコンテンツが充実し、その充実してきたコンテンツを具体的に結び付けていくために、どのようにしたら良いか、ということだと思います。

皆様から良いアイデアがあれば、ご提案いただきたいと思います。

坂本 浩

愛媛県松野町長

DMOが話題になっておりますが、松野町はまだDMOができておりません。これからの取組ということで、皆様に少しお聞きしたいと思うのですが、先ほど言いましたようにJR四国の予土線というローカル線がありまして、宇和島市が始発で、隣の鬼北町、松野町そして高知県の四万十市、四万十町の5市町をつないでおります。

実は、この予土線は四万十川沿いを走っておりまして、非常にコンテンツは豊富でございます。その予土線の5市町で連携して、このコンテンツを売り出すことができないか、そうすることによって予土線の存続にもつながるのではないかと、5市町で話し合っています。



JR予土線 松丸駅

5市町で連携してDMOを作ろうという話に首長同士では合意しているのですが、具体的な調整は難航しており、なかなか進んでいない状況です。

ただ、これからそういった連携した観光施策を

進めていく上で、DMOは必須であると思っております。

様々な方のお知恵を拝借しながら進めている段階ですので、大分県の先進事例もご参考にさせていただきながら、これから頑張っていきたいと思います。

中野 五郎

大分県臼杵市長

大洲市の観光施策の取組ですが、臼杵市と観光資源はよく似ていると思っておりますが、よくあそこまで、観光資源の魅力に磨き上げをなされたと、感心しております。



臼杵城址

皆様の観光地もおそらく同じような状況だと思うのですが、70～80代の店主の方たちがリタイヤの時期に来ております。そのような中、自分の子供に継がせられるだけの将来展望があるか、と考えた時に、見通しが立たず、子供に継がせる勇気がない。また、その子供も帰ってこない状況です。

これまで守ってきた観光地を活かしながら守っていく形に、どうすれば転換できるか考えた時に、やはり大洲市がやられているようなことを見習っていかないといけないと思いました。

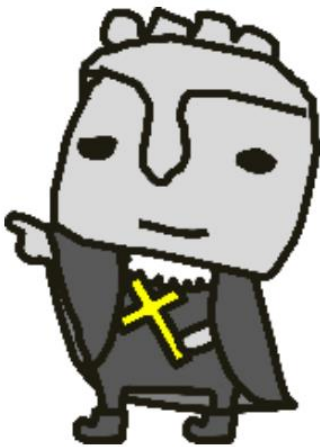
様々なことを大洲市から学ばせていただいているのですが、その中で、1つ思ったことが、熱意と知力、体力のある人たちを地元でどれだけ集められるのか、育てられるのか、ということです。

先ほどの、大洲市のDMOの代表者の話の中でもありましたが、前向きに進んでいけるような人

材の配置が必要だと思いました。

また、5年ぐらい前だったと思うのですが、APUの出口学長に白杵に来ていただいて意見交換を行ったことがあります。その際に出口学長から「中国の富裕層が白杵に来たら、1週間くらい滞在して、100万円くらい普通に使うと思う」と言われまして、まさかとは思いましたが、大洲市の城泊の取組を見ると、あながち、白杵もポテンシャルを獲得できるのではないかと、思っております。効果的な情報発信を行い、新たな客層の獲得を目指していきたいと思っております。

例えば、大洲市で3泊したら、次に白杵市で3泊するといった、九州と四国を循環するような、様々な形で循環していけるような、そういう仕掛けを18市町で、これから考えていくのも必要ではないかと思っております。



“ほっとさん”

白杵市観光PRキャラクター

長野 恭紘

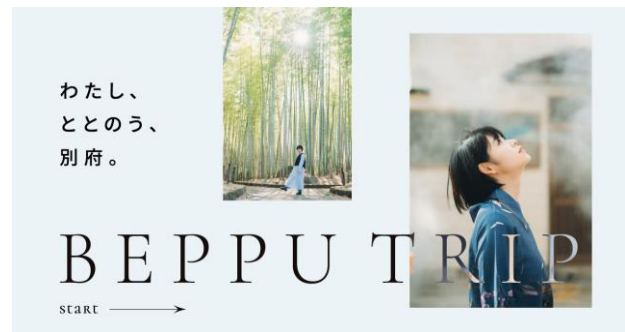
大分県別府市長

ありがとうございました。

時間があつという間に来てしまいましたが、DXのデジタル化「D」の部分ではできたのですが、トランスフォーメーション「X」の方がなかなかできないとよく言われています。

ただデジタル化するだけではなく、変化、進化させていかなければなりません。

そのために、まずは見える化をしていく必要がありますが、最後はやはり「人」というお話でもあったと思っております。



「わたし、ととのう、別府。」

別府モデルコースの紹介



別府市公式宿泊予約サイト